

立川市に古墳はあるのか

～物理探査が明らかにする先史の立川～

先史部会副部会長 青木 敬

立川市には古墳が存在しないのか

立川市を挟むように位置する国立市と昭島市には古墳群が分布しており、立川市にも3基の古墳があるとされています。しかし、詳しい調査資料が失われている、すなわち当時の調査とその成果を正確に検証することが困難なため、立川市には古墳がないものとして扱われることがありました。

今回、新編立川市史編さん事業に伴い、先史部会では、考古学的な調査から立川市内の古墳の有無を明らかにすることを目標の一つに掲げました。そこで古墳として言い伝えられている地点を中心に市内を踏査し、古墳の可能性が高いと判断した遺跡を調査することにしました。

平成28年（2016）11月に市内を踏査した結果、柴崎町四丁目に所在する立川市No.13遺跡（以下、No.13遺跡）が古墳の有力な候補に浮上しました。現在のNo.13遺跡は、塚状の高まりの上に沢稻荷の社殿が鎮座していますが、この高まりが古墳の墳丘とよく似ています。さらに沢稻荷は、古墳がつくられる地形的立地環境にも合致することから、古墳の可能性が高いと考えたのです。

掘らずに調べる方法

さて、考古学の発掘調査は、掘ってみなければわからない貴重な情報が数多く得られるいっぽう、掘ることで遺跡を破壊してしまいます。No.13遺跡は、沢稻荷として今なお地元の崇敬を集める信仰の場として大切にされてきました。学術調査とはいえ、信仰の対象を発掘調査するのは困難です。このように発掘調査がむずかしい場合、古墳である手掛かりを得る方法はあるのでしょうか。

一般的に古墳には、墳丘を取り囲む溝（周溝）が設けられ、墳丘内部には遺骸を安置した石室がつくられたはずです。そこで、発掘調査せずにその存否を明らかにする手段として候補にあがったのが、非破壊の物理探査でした。

沢稻荷：柴崎町四丁目にある稻荷神社。沢は昔の地名で、沢稻荷は沢の中心に位置しています。二月に開催される初午の祭りは三日間かけて行われ、現在神事は諏訪神社の神主が執り行っています。右の写真は平成30年の初午の様子（小川力氏撮影）。



▲立川市No.13遺跡（沢稻荷）全景



▲塚上にまつられている沢稻荷（正面部分）



外見だけではわからない身体内部の異常を発見するため、私たちが病院でレントゲン撮影やCTスキャンをするのと同じく、遺跡でも見えない地下に何が眠っているのか、物理探査によっておおよそ推測ができます。そのため、発掘調査前や発掘調査中に物理探査を実施し、どこの地下にいかなる遺構が眠っているか事前に把握することがよくあります。われわれは、そこに着目したのです。

一口に遺跡調査における物理探査といっても、地中レーダー探査、電気探査、電磁探査など複数の方法があり、遺跡や遺構の特徴に応じて探査の方法を使い分けます。今回のように古墳に伴う地中の施設を調べるには、高周波の電磁波を地中へ放射し、反射の状態から地下の様子を探査する地中レーダー探査が最適と判断しました。

地中レーダー探査によるNo.13遺跡の調査

以上の経緯をふまえ、先史部会では沢稻荷の氏子さんや地権者のみなさまの同意を得て、まず平成30年2月にNo.13遺跡全体を測量しました。つぎに測量成果にもとづき、令和元年(2019)9月に沢稻荷と隣接する畠で地中レーダー探査を実施しました。



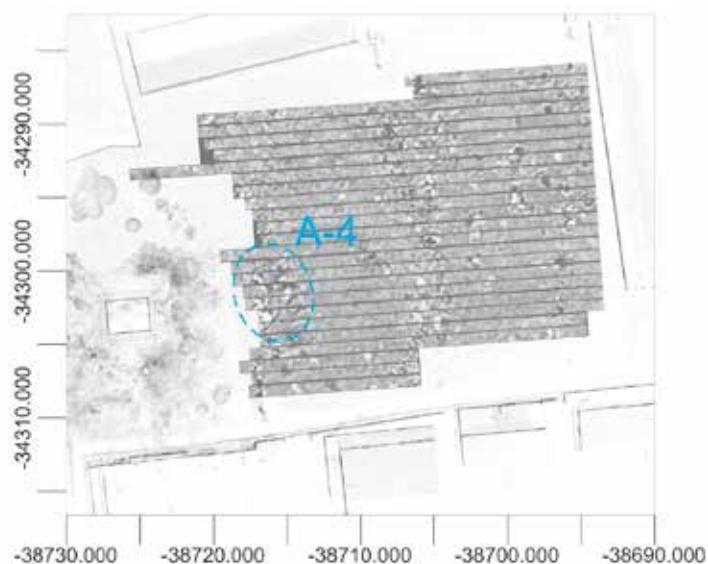
▲No.13遺跡における地中レーダー探査の様子

探査した結果、畠と塹状の高まりとの境界付近で溝らしき落ち込みを捉えました。

図1をご覧ください。平面図の左側が沢稻荷と塹状の高まりですが、その右のグレーで覆われた範囲が地中レーダー探査を行った部分です。A-4（水色で囲ったところ）に窪みが捉えられました。さらに図2では、A-4付近のレーダーが捉えた反応を東西方向の断面で示しましたが、地表下70cmに窪みの上端、1.7mで窪みの底らしき反応があります。この溝は円弧を描くように塹状の高まりに沿うこと、溝の大きさなども加味すると、立川市周辺の古墳で普遍的に認められる周溝の可能性が高いと判断しました。そうなると、No.13遺跡の塹状の高まりは、古墳の墳丘である可能性が一層高まってきます。



地中レーダー探査では、電磁波を地中に照射し空洞や埋設物に由来する反射波形（異常反応）を捉えることで地中の様子を探ります。調査地の状況に応じて探査機材の大きさなどを選択するため、事前調査が欠かせません。また、深くなればなるほど反応を細かく捉えることは難しく、現状では地下2～3mまでが限度です。さまざまな波形が組み合わさっているため（図2）、データの解析には十分な経験が必要です。



▲図1 No.13遺跡東側における地中レーダー探査結果（平面・地下1.8m、図の上が北、機材は東から西へ移動）

探査成果を反映させた測量図が図3です。復元すると墳丘直径20.8m、高さ1.5m以上、周溝外周径24m、周溝幅2m、深さ1mと、周辺の古墳の規模と比較しても大型の部類に属することが判明しました。

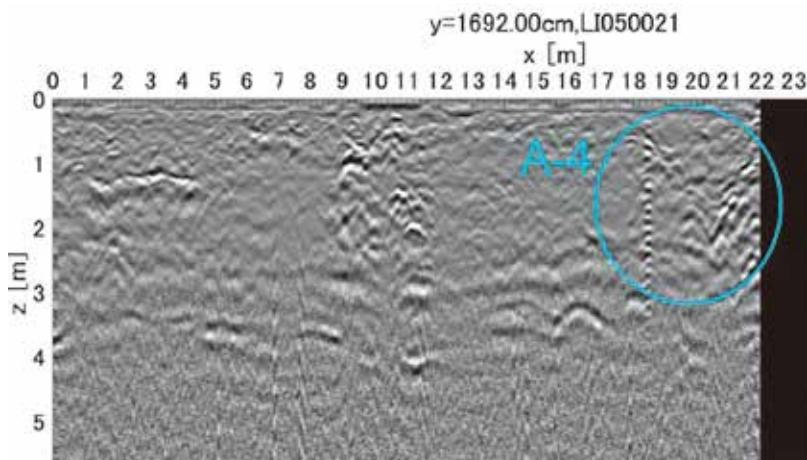
かつてNo.13遺跡の地下をボーリング調査した結果、石室の一部とみられる石材を確認したとの記録が残っています。調査結果が残っておらず詳細は不明ですが、この記録が正しければ、高まりの中に遺骸を納めた石室が存在することになります。高まりが墳丘で、周囲に周溝がめぐり、墳丘内部に石室が存在する可能性が高い、以上の3点からNo.13遺跡は古墳と判断してよいでしょう。

みえてきた古墳群

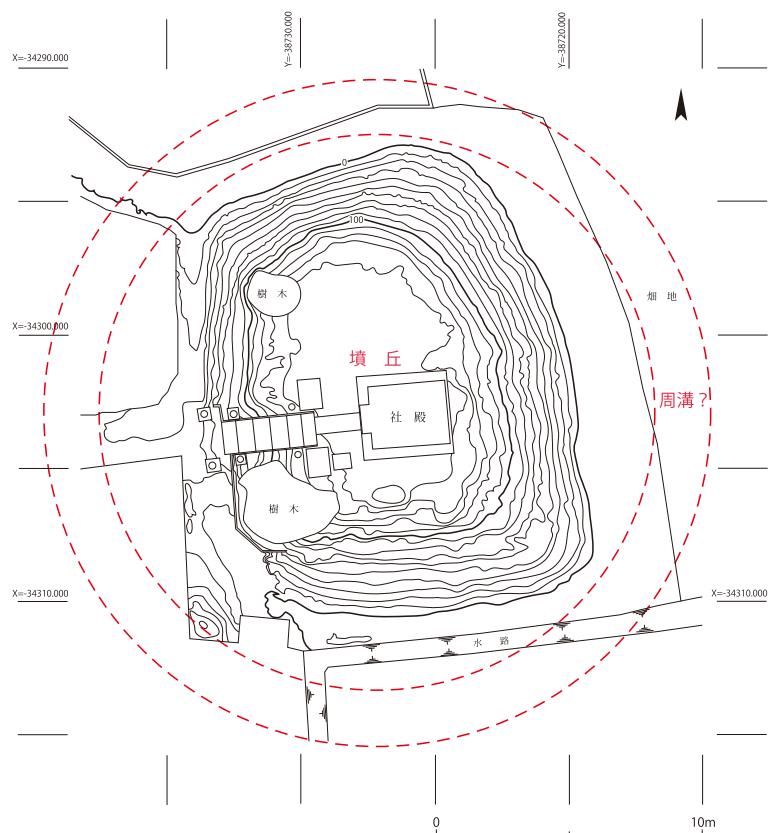
実はNo.13遺跡だけでなく、近隣でも地中レーダー探査を実施し、古墳の埋葬施設あるいは周溝らしき窪みを複数確認しました。かつてNo.13遺跡の近所を発掘調査したところ、別の古墳の周溝と推定される溝が検出されたこともあります。これまでの言い伝えや調査所見などを総合すると、柴崎町四丁目一帯には何基も古墳が点在していた、つまりここに古墳群があった可能性が高まってきたました。

なお、ここで紹介した古墳調査の詳細は、今年度刊行予定の『立川市域の古墳時代』(新編立川市史 調査報告書 先史編3)に掲載されます。立川市域や多摩川流域の古墳時代をより深く知りたい方は、こちらもあわせてご参照ください。

今回、その存在が浮かび上がってきた柴崎町四丁目一帯の古墳群、ここでは柴崎古墳群と仮称しますが、今後調査が進展していくと、今まで謎のベールに包まれていた立川市の古墳を解き明かす鍵が得られることでしょう。古墳時代の立川地域を支配した有力者の実像や、人々がどのような暮らしを営んでいたのか、郷土立川の歴史を明らかにするためにも、柴崎古墳群の実態解明が進むことを願ってやみません。



▲図2 No.13遺跡東側における地中レーダー探査結果 (A-4付近の東西方向の断面)。青線で囲ってある範囲の上方、逆台形状の断面が周溝と推定される部分の反応



▲図3 探査成果にもとづくNo.13遺跡の墳丘と周溝の復元

先史部会では、今年度にもう1冊の報告書である『大和田遺跡第1・3・4地点出土資料 再整理報告書』を、来年度に『新編立川市史 資料編 先史』を刊行する予定です。『資料編 先史』は先史部会が平成27年度から行ってきた調査の集大成であり、立川市域の考古学的な成果を俯瞰すべく編集を進めています。報告書と併せてお手に取つていただければ幸いです。

大和田遺跡発掘調査の様子▶

(昭和29年(1954)

立川市歴史民俗資料館所蔵)

